

仏 の 願 い

平成 30 年 西雲寺だより 夏号 (55 号)



10日 お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

11日 お日中(10:00～) お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

法話 佐々木大円師

——11日はバスが出ますのでご利用下さい——

放送会館前発(8:50)～東別院前～工大温泉前～西安居經由
坪谷発(9:00)

常森発(9:00)～国見～鮎川
～小丹生經由

どなた様もお誘い合わせてお参り下さい

私たちの先祖は、猿から進化したといわれるが、そのきっかけとなったのが、道具と火である。道具と火を用いることによって、猿との違いがはつきり分かれたのである。それ以後人間は少しでも楽で便利な生活を手に入れようと、頭をつかい蒸気や電気を手に入れた。そして二十世紀になって遂に手に入れたのが原子力である。そして太平洋戦争末期に原子力爆弾として使用され一瞬にして広島、長崎の市民二十万人を殺戮したのである。地球上には二万発以上の核弾頭が存在するといわれる。今北朝鮮の非核化について北朝鮮とアメリカとの対話に世界の目が注がれている。

親鸞聖人の生涯とその教え

承元(じょうげん)の法難

専修念仏者への批判

法然上人や親鸞聖人が若い頃修行された比叡山や奈良の仏教は自力聖道門といわれ、自力の厳しい修行によって仏になつていく教えです。また国家によって管理された仏教で、国の安泰や貴族の病氣平癒を祈るところで、庶民が救いを求めるところではありませんでした。そのような法然上人は四十三歳のとき比叡の山を下りられ、洛中の知恩院近くの吉水で、阿弥陀仏の本願に誓われたお念仏一つを称えるだけで、誰でも往生できると説かれたのです。

法然上人の説かれた専修念仏の教えは、非常にわかりやすく、誰にでもできる教えでしたので、老若男女、貴賤を問わず、また武士の間にも広まっていききました。一の谷の合戦で幼い平敦盛の首を斬った熊谷入道直実も法然上人の門弟でした。

しかし菩提心を起し、厳しい自力の修行をする聖道門仏教にとつて、どのような悪人でもお念仏を称えるだけで往生できるという専修念仏の教えは許し難いものだったようです。吉水教団が繁盛するにつれ、比叡山延暦寺から念仏停止の声が上がってきました。また法然上人のもとに集まった念仏者のなかにも、どのような悪を造つても、阿弥陀様は救つて下さるのだから、悪いことをしてもかまわないのだというはね上がり者も出てきたようです。

七ヶ条起請文

元久元年(一二〇四)親鸞聖人が吉水の法然上人の門下になつて三年目、三十二歳のとき比叡山の衆徒は、法然上人の説く専修念仏の停止を求め、要求を朝廷に強訴したので、そこで法然上人は衆徒の批判を解くため、他宗の人との論争を禁止するなど、門弟たちに自肅自戒を求め、「七箇条制誡(せいがい)」を起草し、法然上人はじめ、一九〇人の門弟たちがこれに署名し、比叡案座主に差し出したのです。親鸞聖人は八十六人目に「僧綽空(しゃくくう)」と名をしるしておられます。

興福寺奏状(こうぶくじそうじょう)

また翌年の元久二年(一二〇五)には、奈良の興福寺が「興福寺奏状」を作成し、法然教団の過失を列挙して、念仏禁制を朝廷に訴えました。それには、「勅許を得ないで、新宗を立てた」「阿弥陀仏以外の仏を拝まず、釈尊を軽んじている」など九つの失をあげています。

松虫、鈴虫事件

事態が深刻化していくなか吉水教団にとつて不幸な事件が起こりました。法然門下の美僧、住蓮、安樂は中国の善導大師がお作りになつた『往生礼讃偈(らいさんげ)』に哀しくも美しい音曲を付けて、美声で唱えて人々の心をとらえていました。年が改まり、建永元年(一二〇六)十二月たまたま時の上皇・後鳥羽院が紀州熊野に参詣の間、住蓮、安樂が洛北・鹿ヶ谷の草庵で『往生礼讃』の法会を催したところ、松虫、鈴虫

の女官二人が、ひそかに参加し出家してしまつたのです。帰洛された後鳥羽院は激怒され、これが承元の法難の引き金となつたのです。

承元の法難

松虫、鈴虫事件のあつた翌年建永二年(一二〇七)二月ついに朝廷より専修念仏禁止の命令が下り、法然上人の吉水の教団は解散せられました。

その結果は、非常に厳しいものでした。死罪が四人、流罪が七人で、死罪の中には安樂と住蓮が含まれていました。そして法然上人は土佐国へ、親鸞聖人は越後国へと流罪が申し渡されました。法然上人と親鸞聖人は、刑を言い渡される前に還俗させられました。法然上人は藤井元彦、親鸞聖人は藤井善信、法然上人七十五歳、親鸞聖人は三十五歳のときでした。それぞれの配流地に赴いた二人は、以後二度とまみえることはありませんでした。

親鸞聖人は後に『教行信証』の(後序)に承元の法難について厳しい見方をされています。その主旨は次の通りです。

「ひそかに考えると、天台宗、真言宗など聖道門の教えでは、もはや悟りを開くことができなくなつたので、念仏を称え阿弥陀仏に救いを求める浄土の真宗が盛んになつた。それにもかかわらず、聖道門の僧たちは現実を認識することができず、何が真実の教えであるかわかっていない。また京都の知識階級や指導者たちも、何が正しく何が邪であるかとの判断をすることができない。略：承元元年二月に上皇、天皇をはじめ臣下のは、道理にそむき正義にた

がい、個人的ないかりでもって人を処罰した。そのため真宗興隆の太祖、法然上人と門弟数名は罪がないのに死罪に処せられ、また僧籍を奪われ、俗人にして流罪にされた。この私もまたそのひとりである」と

非僧非俗の名告り

親鸞聖人は流罪に処せられるに当り、「すでに僧にあらず俗にあらず、このゆえに、「禿」の字をもって姓とす」『教行信証』(後序)と宣言されました。僧にあらずとは流罪に処せられるときには、僧の身分のままでは処罰できず、還俗しなければなりません。親鸞聖人は俗名、藤井善信として流罪になったのです。だから自分はもう僧ではない「非僧」といわれたのです。それとこの表現にはよき師法然上人や自分を処罰した国家に対しての厳しい批判が込められているのです。

「非俗」というのは、国家において僧籍を剥奪されて僧ではないけれども、単なる俗人に戻ったわけでもないといわれるのです。親鸞聖人は一生何かの職業について生活されたのではありません。同行同朋の志にたよって一生を過ごされたのです。そしてまた一般庶民と同じ肉食妻帯の生活をしながらも、身には墨染の衣をまといつて僧としての姿をしておられたのです。このような意味で「非僧非俗」といわれたものと思われまます。そしてこのゆえに「禿の字をもって姓とす」といわれました。禿というの

られて、俗人となったのもう剃る必要がなくなつたことを意味しているものとも思われます。

愚禿釈親鸞の名告り

親鸞聖人は吉水時代初めは綽空といい、後に善信といわれましたが流罪になつて僧の名を取り上げられましたので、みずから愚禿釈親鸞と名告られました。これには流罪をご縁として仏者として新しい人生を歩むのだという強い決意が込められています。

愚禿とは法然上人も、愚痴の法然房、十悪の法然房といわれましたように、愚か者という意味です。しかし親鸞聖人の愚禿ということは、法然上人との出遇いを通して如来の本願から賜つた深い自覚の世界をあらわしています。親鸞聖人はこの愚禿という自覚を一生深められていかれましたが流罪の地、越後で京都では想像もできなかったいなかの人々と共に生活したことや、また恵信尼と出遇い結婚し、子供をもうけ、家庭をもたれたことが、愚禿という思いを深められていかれたものと思われまます。親鸞聖人のおことばに、次のようなものがあります。

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと(一念多念文意)

親鸞の上に「釈」の字を入れられたのは、お釈迦さまのお弟子になつたという名告りです。私たちはおかみそりを受けければ必ず「法名釈〇〇」という法名をいただきます。

これは今日から仏法を依り処として生活していきますという決意を表したものです。親鸞聖人が「釈親鸞」と名告られたのには、如来さまから仏弟子とされたのだという強い思いがあつたものと思われまます。如来の本願を生きるものとして、いよいよ本願の世界をあきらかにし、いなかの人々に伝えていくことが仏弟子としての使命であり、よき師法然上人のご恩に報いることだと思われたのです。

親鸞という名告りにも、深い意味が込められています。吉水時代のお名前、綽空、善信は、七高僧のお名前の一字をいただいてつけられたものですが、親鸞というお名前も、七高僧の天親菩薩、曇鸞大師の一字づつをもらつてつけられたものです。天親菩薩、曇鸞大師はそれぞれ『浄土論』『浄土論註』を著され、『大無量寿経』の教えをあきらかにされたお方です。『大無量寿経』には

如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したもう、世に出興するゆえは、仏教を光闡して、群萌をすくい恵むに真実の利をもつてせんとなり

という表現があります。群萌とは萌えいつる雑草のようなものです。如来の大悲は、群萌をすくうことを本願とされたのです。越後の大地に、いのちいっぱいには、はいつくばつて生きる民衆に、如来の大悲はそそれが、名号の真実功德を与えて救おうというのが如来の本願です。親鸞聖人は深い感動をおぼえられたのです。親鸞というのは『大無量寿経』によつて生きるのだという名告りです。

(住職)

西雲寺・世話方集会在開かれました 3/21



昨年秋の台風と、
今年の大雪で、
本堂横のケヤキの
大枝が折れました



改修前のトイレです



玄関トイレを
男女別に
改修工事中です



山門掲示板

人生は
よき師
よき友に
出遇つて
教えを
聞くところ

私たちは人生において、幸せになるため、いろいろなものを求めて生きてきました。それはお金や地位や財産であり、家族であったりします。それらは生きていくために大切なものですが、必ずしも手に入るものではないかもしれませんし、年をとるに従って一つ一つ失われていくものです。人生において一番大切なもの、年をとっても失われないものとは一体何なのでしょう。人生は人と人との出会いによって成り立つといわれます。どのような人と出会ってきたのが、人生において大切な意味をもつのです。私たちは長い人生においてよき師、よき友といえるような人と出会ってきただけで、仏法において賜わるものだと いわれます。よき師、よき友を賜わって教えを聞いていく、この事が私たちの人生において最も大切なことなのではないでしょうか。(住職)



Photo Hayato.M

小丹生町の森本隼人君が西雲寺のしだれ桜を撮ってくれました



東京西徳寺
木村専正師

ご本山差し向け布教

6月14日～17日

お同行宅のお座敷で布教
がつとまるのは、全国的に
も珍しく、伝統を受け継い
でいけるのも、本当に皆さ
まのおかげです。

武周
西雲寺



安田
末定育雄氏宅

本堂
横山忍氏宅



永代経によせて

永代経とは「永代読経」の略で、「末永く（永代に）お経が読まれる」という意味です。「お経が読まれる」とは「お寺が存続し、仏法が繁栄していつまでも続きますように」という願いがこめられています。

「遠く宿縁を慶べ」ということばがありますが、私たちは宿縁厚く、今仏法に遇うことができずして、これは全く不思議というしかありません。限らない過去から、私の宿業に限りないご縁がはたらいて、仏法を聞く身となったのです。私たちは如来さまをはじめ、先祖の方々の大きなねがいのなかに生きてきたのです。

「信に死し、願に生きよ」ということばがあります。「信に死す」とは、この迷いを生きたる衆生が一人でも助からないものがあつたら、私は永遠に仏とはならないと誓われたご本願が聞えたら、この我執にとらわれたこの私に死するのです。そしてお念仏申して弥陀に助けられる。本願に生きる新しい私が誕生するのです。今まで我身の幸せしか考えなかつた私が、縁ある人々が仏法に出遇い共に念仏して助かつていきたいという願いに生きるものとなるのです。子や孫に仏法が相続されることを願って聴聞させていただくのです。

発行

真宗仏光寺派 専念山 さい うん じ 西雲寺
住職 護城一寿
筆頭総代 末定育雄
編集責任者 護城一哉
〒910-3523 福井市武周町5-2
電話 0776-97-2138
メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞ
ご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、
ご感想など、どしどしお寄せ下さい。